様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６３１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2016
課題番号：２４５２０５０８

研究課題名（和文）意味・統語・形態の総合的観点から行う古代日本語の副助詞の研究

研究課題名（英文）Study of adverbial particle in ancient Japanese by from a comprehensive viewpoint of meaning, syntax and form

研究代表者
小柳　智一（KOYANAGI, Tomokazu）

聖心女子大学・文学部・教授

研究者番号：８０３８０３７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は大きく3つある。１つは、副助詞の形態・統語を分析し、副助詞の語形が副詞性という文法的資格を反映することを示した。2つめは、近世以前の副助詞研究を取り上げ、従来見過ごされていた日本語学史的系譜を指摘した。3つめは、文法変化に関する理論的な研究を行い、変化の過程と要因、類型や方向性など基礎的な問題について、新しい知見を提示した。これによって、副助詞研究を文法変化一般の中で考えることが可能になった。

研究成果の概要（英文）：There are three major achievements of this research. First, by morphological and syntactic analysis, it was revealed that the shape of adverbial particle reflects adverbial features. Secondly, literary research pointed out that there is a genealogy of adverbial particle studies that had been overlooked. Thirdly, we conducted a theoretical study on grammatical changes, presented new findings on fundamental issues such as the process and factors of change and the type and direction of change.

研究分野：日本語文法史

キーワード：副助詞　文法変化　副詞

１．研究開始当初の背景

本研究は、大きく 2 つの研究動向を背景として開始した。主要なものとして(1)副助詞に関する研究動向があり、関連するものとして(2)文法変化に関する研究動向がある。(2)は現在ますます活況を帯び、開始後すぐに(2)との関連を視野に入れながら(1)を進めるのが適当だと感じられた。

(1) 現代の副助詞研究には大きく 2 つの流れがある。1 つは、江戸時代以来の伝統を継ぐ国語学的な研究（代表は山田孝雄『日本語文法学概論』宝文館、1936 年）で、もう１つは、現代語のとりたて研究（代表は沼田善子『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房、2009 年）である。それぞれ関心に微妙な違いがあり、国語学的研究では個々の副助詞に注目した意味論的考察に重点が置かれ、とりたて研究では、格助詞との承接や、連体節内への出現可能性など、統語的な考察が重視されている。本研究代表者は前者に与し、意味に関心を持つが、意味と形式の関係を重視するので、統語的な観点も等閑視できなかった。

国語学的研究も統語的特徴を考慮しなかったわけではなく、特に助詞の相互承接に注目し、これを根拠に副助詞を 2 種類に分けている（近藤泰弘『日本語記述文法の理論』ひつじ書房、2000 年）。本研究代表者もこれを追認し、中古語の副助詞が、前接部にだけ関わる「第１種副助詞」と、出現する節（clause）全体に関わる「第 2 種副助詞」に分かれ、他に中間的な「など」があることを明確にした（小柳智一「副助詞研究の可能性」『日本語文法』8-2、2002 年）。このうち、第 1 種副助詞の考察は一定程度進んでいるが、第 2 種副助詞については不十分だった。

また、副助詞の意味的・統語的な研究には先行研究の蓄積があるが、形態的な研究は皆無と言ってよい状態だった。副助詞の語形にどのような意味（文法的価値）があるかという問題は、通時的な考察にも関わり、日本語文法史の視点に立ってはじめて可能になる研究である。

さらに、国語学的研究の副助詞把握で最も重要なのは、副助詞を「副詞性の助詞」と捉えることで、この把握の有効性は本研究代表者も示してきたが、学界全体に広く理解されるまでには至っていない。その原因の１つに、「副詞性」と言った時の副詞がどのようなものであるかを明確に示しえていないということがあると考えられた。副詞について根本から考察する必要に迫られていた。

(2) 現代の文法変化研究の盛況は、いわゆる「文法化（grammaticalization）」研究（代表は Hopper&Traugott. *Grammaticalization*, 2nded. C.U.P. 2003 年）に刺激されたところが大きい。しかし、本研究開始当初は、外国語を対象に作られた理論・モデルを無批判に日本語に当てはめるタイプの日本語研究が多く、その理論・モデルそのものの妥当性や、日本語に適用することの当否を検証する研究はほとんどなかった。これは研究の推進にとって望ましい状況でなく、先行理論を参照しつつ、文法変化について基礎的な事柄から考え直す必要性が強く感じられた。

また、「文法化」の典型とされるのは、日本語に即して言えば、名詞・動詞などの内容語が助詞・助動詞などの機能語になる変化だが、ここに見られる「内容語→機能語」「自立的形式→付属的形式」という変化の方向性は、逆行する事例がないように言われていた（「一方向性(unidirectionality)」仮説）。副助詞は機能語の一種で、副助詞の意味変化や、形態的特徴を考える際には、文法変化一般についての考察と関連づけて進めることが研究の視野を広げると考えられた。

２．研究の目的

本研究の目的として、大きく 3 つを設定した。(1)古代語の副助詞に関する研究目的、(2)副助詞そのものではなく関連する事柄に関する研究目的、(3)文法変化に関する研究目的、である。それぞれの研究目的のうち、特に研究が進んでいない課題に重点を置いて取り組むことにした。

(1) 副助詞の全体像を捉えるためには、意味的・統語的・形態的な観点から総合的に考察する必要があるが、このうち形態的な研究には従来、手が付けられてこなかった。そこで、意味や統語とも関連させながら、副助詞を形態的に分析する。上代語の副助詞の語形に何か意味（文法的価値）があるのか、あるとすればどのような意味かという問題を明らかにすることを目指した。また、副助詞の統語的特徴を歴史的に考察することも課題とした。

(2) 「副助詞」という名称は、山田孝雄が「副詞性の助詞」という意味で命名したものだが、近世以前に、後に「副助詞」と称されるものをどのように捉えていたかは、興味深い問題である。しかしながら、この点は十分にわかっていない。副助詞そのものの研究ではないが、この日本語学史的な問題を明確にしておくことは、現代の副助詞研究を俯瞰して位置づける上で重要である。これの解明を目的の 1 つとした。また、「副詞性の助詞」と言う場合、副詞をどのようなものと捉えているかが問題になる。しかし、副詞は最も研究が遅れた品詞であり、副詞の本質を意味的に把握するのも喫緊の課題である。

(3) 文法変化については、そもそもどのような種類があるのかがわかっていない。なぜどのように起こるのかについても、先行説には検討の余地がある。主に外国語を対象とした通言語的な研究が多く、中には日本語を取り上げるものもあるが、日本語のデータに誤り

を含むものも散見された。副助詞は機能語の一種であり、日本語の副助詞だけを孤立して考えるのではなく、通言語的な研究の成果も参照しながら、新しい観点を取り入れて考察することにした。そのためには、日本語文法史に適用可能な理論・モデルを構築する必要があり、それを研究目的とした。

３．研究の方法

本研究の基本的な方法は、言語研究としてオーソドックスなものである。すなわち、文献と用例を幅広く採集し、細心の注意を払って確認および吟味した上で分類・整理し、そのデータに基づいて考察を行うという方法である。ただし、考察の仕方に独自性がある。複数の対象や観点を組み合わせて、問題の発掘に努めながら、個別と全体のバランスを取った考察した。以下に「２．研究の目的」に対応する形で具体的に示す。

(1) 上代語の副助詞を形態的に分析するに当たり、副助詞そのものの語形を分析するのと平行的に、名詞に関する形態的考察を行った。上代語の名詞は語末における母音交替の現象が活発であり、これについては、川端善明『活用の研究Ⅱ』（大修館書店、1979 年）、中山昌久（1990）「語形交替のひとつの場合」『国文学解釈と鑑賞』55-7（pp.93-112、1990 年）という示唆に富む貴重な先行研究があるが、考察の深さゆえか、ほとんど理解されずにいる。これらの研究を消化した上で、問題点を整理し、さらに接尾辞の語構成の問題を絡めて、副助詞の語形成と関連づけながら、両者を整合的に捉えるという方針を立てた。副助詞の語形の分析を、名詞および接尾辞の語構成論と関係づけた視点は、本研究独自のものである。

(2) 副助詞の捉え方に関する日本語学史的研究のために、中世末の歌学書である姉小路式を取り上げた。これまでの文法学史研究では、近世の国学（例えば、本居宣長や富士谷成章の研究）を対象とすることが多く、近世より前の文献を対象にするものはほとんどなかった。これは、中世の文献は秘伝書の性格が色濃く、まとまった記述がなかったり、記述があってもわかりにくかったりすることが理由だと思われる。しかし、その中にあって副助詞に関する数少ない記述を集め、合理的な本文解釈を行うことで、中世のイメージを捉えることを試みた。このような研究は本研究以前にはなかった。

　また、「副詞性の助詞」としての副助詞を理解するために、副詞の本質について考察する。個々の副詞語彙ではなく、副詞の全体像を捉える先行研究には、森重敏の一連の研究（概要は『日本文法通論』（風間書房、1959 年）にまとめられている）、川端善明の一連の研究（例えば「時の副詞―述語の層について その一―」『国語国文』33-11/12、pp.1-23、34-54、1964 年）、工藤浩の一連の研究（例えば「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法 3 モダリティ』岩波書店、2000 年）、仁田義雄の研究（『副詞的表現の諸相』くろしお出版、2002 年）がある。これらを踏まえながら、副詞の見方を考察した。従来と異なるのは、副詞と副助詞の双方を視野に入れ、2 つの間を往還しながら考察を行う点で、これも本研究独自のものである。

(3) 文法変化一般を理解するために、理論的な考察を行った。文法変化の理論的な研究は、英語学や通言語的な研究の方で進んでいる（例えば Heine&Kuteva. *World Lexicon of Grammaticalization*. C.U.P. 2002 年）。しかし、本研究代表者の見るところ欠点も多く、日本語文法史にそのまま適用することにも問題を感じた。そこで、文法変化はどのように、なぜ起こるのか、文法変化にはどのような種類があるのか、などの根本的な問題を一から考え直すことにし、理論の基礎作りを企図した。言語の歴史的な変化はその時に 1 回だけ起こり、自然科学の対象のような再現可能性がない。しかし、事例を集め、類型化・一般化を行うことによって、1 回 1 回の変化をアドホックに説明することが避けられる。そのための手段として、モデルを構築するという方法をとった。

　また、文法変化一般を考察しながら、副助詞の事例を見直すことも行った。これによって、一般・普遍と個別・特殊の両方を見据えながら考察を進めることができ、現実を切り捨てた抽象論や、個々の副助詞を場当たり的に解釈する恣意が回避でき、バランスのとれた考察を実現することができると考えた。

４．研究成果

本研究の成果は「２．研究の目的」に応じて大きく 3 つ、(1)古代語の副助詞そのものに関する成果、(2)副助詞の周辺に関する成果、(3)文法変化に関する成果がある。特に(3)については、当初の予想を大きく上回る成果が得られた。以下に具体的に述べる。

(1) 副助詞そのものに関しては、次の成果が得られた。まず、一見すると副助詞とは無関係な、上代に見られる「名詞＋じもの」について考察し、副助詞が程度修飾句を統語的に形成する筋道を示すことができた。その成果は「「じもの」考―比喩・注釈―」（稲岡耕二・神野志隆光・芳賀紀雄編『万葉集研究』35、pp.247-284、2014 年）として公刊した。

　次に、副助詞の形態的な考察を行い、副助詞の語形が副詞性という文法的資格を反映すること、および、形式副詞との形態的な平行性や、接尾辞から機能語へという一般的でない文法変化の方向性が見出されること、などを指摘した。その成果は「５．主な発表論文

等」の〔雑誌論文〕③として公刊した。
　また、上代日本語の接尾辞を名詞の語形変化と関連させて考察し、それが副助詞を形成する接尾辞に関係することを示した。その成果は「５．主な発表論文等」の〔雑誌論文〕①として公刊した。

(2) 副助詞の周辺の問題に関しては、次の成果が得られた。まず、副助詞研究史に関する研究を行い、副助詞を副詞と関連づけて両者に意味的な共通性を認める視点が、中世の秘伝書姉小路式とその注釈書に見出されることを示し、これと同型の視点が現在の副助詞研究まで続き、それらを繋ぐことで副助詞研究の系譜が描けることを明らかにした。その成果は「５．主な発表論文等」の〔雑誌論文〕⑤として公刊した。
　また、近世の文法書である富士谷成章『あゆひ抄』の読解を通して、機能語について考察し、形式副詞という、副助詞と密接に関係する観点をあぶり出した。その成果は「分類の深層―『あゆひ抄』の《隊》から―」（日本語学会 2017 年度春季大会シンポジウム、2017 年 5 月、於関西大学）として発表する予定である。
　次に、副詞の本質について考察した。副詞の本質を、数量性と様相性を表すことと規定し、これらをどのように表すかによって副詞の種類分けができ、同時に全体の組織が捉えられることを示した。その成果は修正を加えつつ、「副詞の入り口―副詞化の条件―」（平成 28 年度名古屋大学国語国文学会春季大会シンポジウム、2016 年 7 月、於名古屋大学）、および「５．主な発表論文等」の〔学会発表〕①として発表した。

(3) 文法変化に関しては、次の成果が得られた。まず、言語変化の段階をどのように設定し 、変化の要因として何を考えるべきか、という最も根本的な問題について考え、従来の考えが不適切であることを示し、変化の段階のモデルと、要因と見なすための条件を提示した。また、歴史研究にも社会言語学的な視点が必要であることを述べた。その成果は「言語変化の段階と要因」（東京学芸大学国語国文学会『学芸国語国文学』45、pp.14-25、2013 年）として公刊した。また、従来言われている言語変化の一般的傾向と時代的動向が、個々の言語変化の事例の要因になりえないことを指摘する研究も行った。その成果は「５．主な発表論文等」の〔雑誌論文〕④として公刊した。
　次に、近年頻用される「文法化」という用語は曖昧さを含んでおり、現象の正確な把握のために再整理を行った。「文法化」は「機能語化」という用語に呼びかえた方が実態に合って誤解もなく、さらにこれ以外に「多機能化」や「昇格機能語化」「複合機能語化」があることを示し、大きく「機能語生産」として括れることを論じた。その成果は「機能語生産―文法変化の種類Ⅰ―」（国学院大学国語研究会『国語研究』76、pp.60-72、2013 年）として刊行した。さらに、文法変化の妥当な種類分けという問題に取り組み、「文法制度化」という新たな概念を提示した。この概念のもとで文法変化は 4 種類に分類され、上記の機能語生産の諸タイプは、この中に収められる。その成果は「文法制度化―文法変化の種類Ⅱ―」（聖心女子大学『聖心女子大学論叢』121、pp.57-76、2013 年）として公刊した。
　次に、文法変化における意味変化について研究した。新しい意味がどのように生じるかという問題を立て、「非表意の表意化」というメカニズムによって説明した。その成果は「文法的意味の源泉と変化」（『日本語学』32-12、pp.44-54、明治書院、2013 年）として刊行した。また、意味変化の問題に関連して、多機能化における文法的意味の多義化をパターンごとに分類し、モデル化を行った。その過程では「重層化（layering）」という「文法化」研究で言われている装置を、精密にして発展させた。その成果は「文法変化と多義化―意味の重層化をめぐって―」（『日本語学』36-2、pp.4-13、2017 年）として公刊した。
　次に、文法変化の方向性について考察した。「文法化」研究では「自立的な内容語→付属的な機能語」という方向性が指摘されているが、これは変化の方向性の一部を取り出したにすぎず、これを法則と見なすのは誤りであることを指摘した。そして、機能語には付属的な形式（助詞・助動詞）の他に、自立的な形式（副詞・感動詞など）も認める必要があること、このことを勘案した上で、変化の組み合わせを考えると、9 種類にパターン分けができ、さらに拡大させ、そこから変化の方向性として 2 つの傾向が導き出せることを述べた。また、変化に方向性がある理由は、上記の「非表意の表意化」のメカニズムの性質に基づいて説明できる場合と、非文を回避する統語的な条件によって説明できる場合があることを論じた。その成果は「５．主な発表論文等」の〔雑誌論文〕②および〔図書〕①・②として刊行した。
　最後に、「文法化」研究で唱えられる「（間）主観化（(inter)subjectification）」という理論があり（Traugott の一連の研究など）、これについて、「主観」という用語の吟味から始め、先行研究の不備を指摘し、「主観」「客観」「間主観性」で何を指すべきかを検討した。結論としては、期待されるほど「主観」という用語は文法変化の研究に有効でない。また、「間主観化」という用語も誤解に基づくものなので、適切な「対人化」に言いかえ、その上で、対人化の特徴を明らかにした。以上の成果は「「主観」という用語―文法変化の方向に関連して―」（青木博史・小柳智一・高山善行編『日本語文法史研究』2、pp.195-219、2014 年）、および「対人化と推

意」（国学院大学国語研究会『国語研究』79、pp.71-84、2016 年）として公刊した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

① 小柳智一、名詞の語形変換―接尾辞における母音交替―、日本語文法史研究、査読有、3 号、2016 年、pp.1-22

② 小柳智一、文法変化の方向、KLS（proceedings）、査読有、35 号、2015 年、pp.323-334

③ 小柳智一、副助詞の形―「だに」「さへ」「すら」の場合―、国語語彙史の研究、査読有、34 号、2015 年、pp.37-54

④ 小柳智一、言語変化の傾向と動向、日本エドワード・サピア協会研究年報、査読有、28 号、2014 年、pp.17-27

⑤ 小柳智一、たましゐをいれべきてには―副助詞論の系譜―、日本語の研究、査読有、9 巻 2 号、2013 年、pp.1-15

〔学会発表〕（計３件）

① 小柳智一、副詞と副詞化の条件、成蹊大学アジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「認知言語学の新領域開拓研究」シンポジウム「認知言語学の内と外から言語変化を捉え直す」、2016 年 8 月 12 日、成蹊大学（東京都武蔵野市）

② 小柳智一、対人化と推意、国立国語研究所国際シンポジウム「文法化：日本語研究と類型論的研究」、2015 年 7 月 4 日、国立国語研究所（東京都立川市）

③ 小柳智一、文法変化の方向と文法的意味の記述、関西言語学会第 39 回大会、2014 年 6 月 15 日、大阪大学豊中キャンパス（大阪府豊中市）

〔図書〕（計２件）

① 小柳智一（大木一夫・多門靖容編）、ひつじ書房、日本語史叙述の方法、2016 年、341 ページ（pp.55-73）

② 小柳智一（藤田耕司・西村義樹編）、開拓社、日英対照文法と語彙への統合的アプローチ―生成文法・認知言語学と日本語学―、2016 年、488 ページ（pp.110-115、pp.380-400）

６．研究組織

(1)研究代表者

小柳　智一（KOYANAGI Tomokazu）
聖心女子大学・文学部・教授
研究者番号：80380377